海ノ民話学ジャーナル（創刊準備号）立上げによせて

海は天国か地獄か～矛盾が生み出す魅力

池ノ上 真一（北海商科大学一般社団法人日本海洋文化総合研究所）

今、改めて問い直す、海と人の関係

海は人類にとって豊かな恵みをもたらす一方で、時に甚大な被害をもたらす矛盾した存在である。東日本大震災や能登半島地震は、海が与える恩恵と脅威の両面を改めて浮き彫りにした。復旧・復興の過程では、単なるインフラ整備にとどまらず、地域文化や生活基盤の再構築が求められている。また、気候変動による海水温や潮流の変化は、漁業資源の分布に影響を及ぼし、日本近海でも漁獲種の変化が報告されている。この変化は経済のみならず、食文化や生活習慣にも波及し、海と人の関係そのものを揺るがしている。

そもそも、海は人類にとって畏怖の対象でありながら、生命の源でもある。太古の昔から、海は死と隣り合わせの存在として民話に刻まれてきたが、同時に生命の誕生の場であり、ミネラルの循環を通じて多様な生態系を育んできた。人々はこうした二面性という矛盾を受け入れながら、海と密接に関わり続けてきたのである。しかし、近代化の進展とともに、海を資源として一方的に利用する姿勢が強まり、その結果として、乱獲や海洋汚染、さらには気候変動といった地球規模の問題が顕在化している。

こうした海と人の関係は、1つの普遍的な枠組みで捉えられるものではなく、多様な環境や歴史的背景のもと、それぞれの地域や文化に応じた価値観として形成されてきた。ディズニーの「イッツ・ア・スモールワールド」のような単一の調和的な世界観ではなく、時に対立し、相互に影響を及ぼしながら変化していく、多層的で複雑な海洋文化が存在するのである。この視点を持つことで、海と人との関係が単なる「共存」や「利用」といった単純な構造ではなく、矛盾を孕みながらも進化し続ける動的な関係性であることが浮かび上がる。

本ジャーナルでは、自然科学・人文科学・社会科学の視点を交えながら、海の民話を題材とし、海洋文化の歴史と現状、そして未来について多角的に考察する。災害からの復興や気候変動による海洋環境の変化を踏まえつつ、海と人の関係性が持つ多様性とその意味を問い直し、持続可能な未来へ向けた新たな視点を見つけ出すことを目的とする。

海ノ民話のまちプロジェクト

本ジャーナルは「海ノ民話のまちプロジェクト」の一環としての取り組みである。「海ノ民話のまちプロジェクト」とは、一般社団法人日本昔ばなし協会が2018年に立ち上げたもので、「海とのつながり」と「地域の誇り」を次世代に伝え、語り継ぐことを目的としている。当該プロジェクトでは、日本各地に伝わる海にまつわる民話や伝承を選定し、それぞれのストーリーに込められた思いを「海ノ民話アニメーション」として表現している。これらのアニメーションは公式サイトやYouTubeチャンネルを通じて公開され、広く一般に親しまれることを目指している。また、民話が伝承されている地域を「海ノ民話のまち」として認定し、地域振興の一環としても活用されている。さらに、教育や観光など多様な場面での利活用が支援され、地域文化の継承に貢献している。

本ジャーナルは、この海ノ民話のまちプロジェクトの意義を学術的な視点から考察するものである。海と人の関係は、単なる資源の利用や経済活動にとどまらず、文化や価値観の形成にも深く関わっている。海の民話は、過去の人々が海とどのように向き合い、共存してきたのかを示す貴重な記録であり、そこには現代社会が直面する課題への示唆も含まれていると考える。

多様な学術領域から海ノ民話を捉える視座

本創刊準備号では、海ノ民話のまちプロジェクトがこれまでに取り組んできた日本各地の海ノ民話のアニメーション化やアーカイブ化が、どのような意味や価値を持つのか、また本プロジェクトが今後、日本や各地域、そして人々にどのように貢献できるのかを検討した。つまり、海の民話を先人から受け継いだ貴重な遺産と捉え、その意味や価値をいかに再発見するか、さらに、現代社会においてその意味や価値を創造するためのあり方や方法とは何かについて、民俗学・考古学・文化人類学・地域学・生物学・生態学・計画学・学習科学など様々な学問領域の専門家や実践家と共に探究し、以下のとおり大きくは2つの問いをもとに視座を提示した。

1. 海ノ民話が持つ意義や価値とは

現代では、海と人の関係が希薄化し、社会的背景や価値観の変化によって海洋文化が継承されにくくなっている。産業の変化や都市化の進行により、海を生活の一部として捉える機会が減少し、伝統的な知識や価値観が次世代へと受け継がれにくくなっている。そんな状況を踏まえ、海ノ民話にはどんな視座から意義や価値を言及できるのか。

本ジャーナルでは、海ノ民話がもつ多様性という特徴、水平的世界観への気付き、海への畏敬の念、生業の継続の知恵、そして神話に見る海の位置づけや陸との関係、昔話を通じた学び、災害文化や伝統的生態学知識としての意義などについて、それぞれ専門的な観点から言及した。

2. 海ノ民話のまちプロジェクトはどんな貢献ができるか

海と共に生きる人々の歴史や文化は、民話を通じて次世代へ受け継がれてきた。しかし、現代社会では海への恐れや畏敬の念が薄れつつあり、その継承が課題となっている。本ジャーナルでは、過去の海難事故や海と人との関わりを学ぶ博物館展示、高校生を巻き込むことで、若い世代の視点を取り入れた新たな継承方法の検討、開拓された島における史実の民話化の可能性、海ノ民話アニメーションに関する国際認証制度の検討、現代の社会課題解決に繋がる民話の再解釈のあり方に言及した。

海ノ民話などのナラティブ（物語）を用いたアプローチは、海洋文化を現代の社会課題の解決において大変有効だと考えられる。論理的思考は収束的である一方で、ナラティブは発散的な思考を促し、多様な視点を提供すると言われている。海を「誰のものか」という問いを考える際も、ナラティブを用いることで、資源としての海洋利用、所有権や縄張り争い、文化の形成といった多面的な視座を持つことが可能となる。本ジャーナルで提示した視座は、その思考を発展させるきっかけとなることを期待する。

海ノ民話学の地平

海ノ民話は、単なる伝説や物語ではなく、人々が長い年月をかけて海と向き合い、共存する中で培ってきた知恵と経験の集積である。本号で掲載した論考を外観すると、その本質的な価値は、「恐れ」と「暮らしの継続」という2つの要素に象徴されるのではないか。これは、本稿冒頭で記述した人々に豊かな恵みをもたらす一方で、命を奪う厳しい存在という矛盾に通ずる。

現代社会では、グローバル化、気候変動、技術革新などの影響により、人と自然の関係が大きく変化している。特に、国際的な対立の激化や、経済の変動が社会の不安定さを増し、持続可能な社会のあり方が問われている。このような時代において、地域社会の継続や価値創造の手がかりとして、海ノ民話が持つ海洋文化の暗黙知に再び注目する意義は大きい。

海ノ民話学は、海と人の関係を「海洋ビッグヒストリー」の一環として捉える学問である。これは、宇宙の誕生から人類の歴史を俯瞰し、未来を考えるビッグヒストリーの視点と共鳴する。海は生命の起源であり、人類の文明の発展に深く関わってきた。こうした流れの中で、海ノ民話は海との関わりを再考する貴重な手がかりとなる。私が20年前に経験した沖縄・竹富島の暮らしでは、離島ならではの「恐れ」と、それを乗り越えた「誇り」が共存していた。民話は、地域の歴史と人々の暮らしの痕跡を今に伝え、アイデンティティや誇りの醸成に寄与していた。本ジャーナルは、こうした視点を共有し、海ノ民話を基軸とした学問探究のための共創的なコミュニティ形成を目指す取り組みである。その志を同じくする人々と共に、新たな知見を生み出し、未来への道筋を模索していきたいと考えている。